
グロスマン

財前太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グロスマン

【Nコード】

N2603A

【作者名】

財前太郎

【あらすじ】

情報を知らない恐ろしさ。この世には頭の良い人々に都合のいいように作られているものがたくさんある。だが、それは我々が勉強しなかった罰なのである。それをよく知る男がいる。グロスマン・。。。

肺炎（前書き）

- 証言 -

わたしの娘は今、入院中なんです。

え？何故かって？・・・肺炎です。マイコプラズマ肺炎。

でもなんだか・・・肺炎って医師にとっては面倒くさい病気らしくて・・・。

今回、この事実を知れたけど、知らない人はいっぱいいるんじゃないでしょうか？

肺炎

秋が去り、冬がやってきた。

また間もなく、インフルエンザ患者が増えるだろう。

医師達は、予防注射を客つりの道具として使っていた。

そんなときの、ことである。

「先生、熱がまだ下がりません」

真っ赤な顔をして咳き込む少女。それを心配そうに見つめる母親がいる。

彼女らと対座しているのは、私営病院の医師である。

「ほうほう」

医師は少女をまじまじと見て、服をぺろんとめくり、聴診器を押しつけた。

「ん〜、やっぱり肺炎にもなっていない。気管支炎にもなっていないよ。風邪だね」

そう言う医師に、母親はしびれをきらして言い放った。

「でも先生！もう10日目ですよ！まだ38度台の熱ですよ。風邪ってこんなに長引くことはあるんですか？」

「お子さん、どうかに出したでしょ」

ぐっと医師の顔が母親に迫った。

母親はたじろぎながらも、強気な口調で

「出したっていつても、熱が少し下がったから、ピアノのレッスンを30分だけ・・・」

と言ったが、逆にとられてしまった。お得意の「その油断が原因です！」である。

「風邪の薬、出しますね」

いつものお別れの言葉が、母親にはいらつきに感じられた。

病院を出た2人は、車に乗り込もうとした。
そのときである。

ふと、感じるのだ。誰かが見ている。母親は感じた。
くるつと振り向く。誰もいない。気のせいなのか。
再び正面を見る。

「……………」

目の前には、白い、笑い顔のマスクをかぶった人が立っていた。
身長や体つきから見ても、男だろう。

その男は、じつと2人を見つめている。

「……………」

恐くなった母親は「何かご用ですか?」と言った。

「……………」別に……………」

ぶるつという寒気が、2人を襲った。

母親は絶えられず、急いで車に乗り込んだ。

「ただねえ……………」

(……………えっ!?)

つい、手を止めてしまった。白いマスクの男が、ぐんと近づいてくるのが分かった。

「ただねえ……………あんたのお子さんは肺炎だよ。市立病院に
言ってみれば、分かるさ」

そう言い残して、たつたと病院の暗い裏門へ入っていった。

(なんだろう……………今の人……………)

そう思いながらも、車は市民病院の方へ向かっていた。

翌日のことである。

あの少女を診察した私営病院の医師が、遺体で発見された。
死体には胃袋がなかったという。

胃袋は、そのまた2日後に見つかった。

中には、報告書が一枚。裏には、こう書いてあった。

“ 肺炎ノ報告書 面倒ニテ 風邪ト診断スル者 生キルベカラズ ”

肺炎（後書き）

- 証言後記 -

そういえば、あのマスクをかぶった人。
ネット上で結構噂らしいですよ。
名前は確か・・・・・・・・。。。

難聴者（前書き）

- 証言 -

私のね、近所に難聴者の方がいらっしやるの。
耳が聞こえないって、ずいぶん不自由かと思ったら
意外にもそうでもないみたいね。
だから、トラブルに巻き込まれたみたいよ。

難聴者

境さかいという名の男がいる。

彼は、世間の言う難聴者である。

難聴者どうしでネットワークがあり、夫婦がある。

境も妻が難聴者であり、息子も難聴者であり、そして愛人も難聴者であった。

彼は今日も、パチンコ店で愛人と待ち合わせしていた。

パチンコ店で、境は愛人に向けて万札を出し

(今日は、これで美味しいものでも食べようかと手話を送った。愛人も笑顔で

(そうね)

短く相づちをうつた。

2人はそのまま高級レストランに入った。

美しいコップがシャンデリアの光に反射し、目に染みるように輝いていた。

(そういえば、今日は話があるって言ってたね)

話を切り出したのは、意外にも男だった。

女は、しばらくそれに答えなかったが、すっと顔を上げた。

(ねえ、奥さんとはいつ別れられるの?)

(うつ・・・今、その、あの、まだ言っていないんだ)

(なんで!? 私は主人と別れたのよ! なんですよ!)

女は今までの鬱憤が爆発したように、男に差し迫った。手話なので、手を振る度にぺちぺち音がする。

そんな時であった。

境の携帯が、ぶるぶると震えた。

(すまんな)

境は携帯を手に取り、内容を開こうとした。が、発信者は不明である。

開いてみた。

“ろくな職についてないのに、余裕があるな”

それしか書いていない。

境は不気味に思い、すぐ消去した。が、腑に落ちぬ点があることに気づいた。

(……そういえば、何で金に余裕があるって分かるんだ？)すると、再び携帯が振動した。

“あんたの　すぐ近くにいますからさ”

ぎょっ！冗談じゃない！

境はそう思い、辺りを見回した。誰もいない。タキシードを着た者、上品な人々ばかりで、怪しい者は誰一人といない。

(不気味なはずだ……)

そう思いながらも、内心ひやひやしていた。とりあえず、話をつけねばと思い、ごめんという仕草をして席に戻った。

女は境の顔の変わりように、動揺してる。

(どうかしたの?)

(ちょっと怪しいメールが届いてね。でも大丈夫だよ)

(そう、で、離婚の話は……)

(今はまだ……返事ができないよう……)

ついに女はガツと立ち上がり、激しく手をふるわせた

(もういいわ！もうだめよ！別れましょう、わたしたち)

そう言って、出て行ってしまった。

その夜。

帰宅途中の難聴者の女が、殺された。
女の死体の横には、男の死体があった。
境である。

右手に包丁を握り、彼の愛人の胸に突きさしている。が、境は誰に殺されたのか。

そのとき、左手に握られていた携帯が、激しく振動した。
メールは、いじらずに勝手に開かれた。

“ 有り余ル 金ノ正体 障害者年金ナリ
軽イ障害 苦ニナラズ 金力カラズ
男女トラブル 起キルモ 当然ナリ
コレガ 世ノ 現状ナリ ”

難聴者（後書き）

- 証言後記 -

障害者年金つて、たくさんもらえるのね。

もつと重い症状の方に、たくさんお金をあげれば
今回みたいな殺人も起きなかったのにねえ。

オタク（前書き）

こっ…こんにちは。

私はみんなからオタクと言われている少年です。

でも…今は違います。

あの人に出会えたおかげで…。

オタク

最近はどうやらオタクの見方が変わってきているらしい。と世間では喧かれています。

オタクの集う秋葉原では、世間に勇気づけられ、恋愛に挑戦するオタクも少なくないという。

秋葉原。秋葉原は面白いところでもあり、恐ろしいところでもある。

とある喫茶店には、いかにも自己管理の出来ていなさそうな少年達が集い、少なくとも美人でないメイド姿の少女に「ご主人様！」と言われて喜んでいいる。我々から見ると、非常にみにくいものだが、彼らの中では、どうやら常識らしい。

人はそこを「メイド喫茶」と呼ぶらしい。

今日もメイド喫茶は、オタクの少年であふれていた。

「はい、あーんして下さい、ご主人様」

「うふふふふ！あーん！」

実に不気味な会話ではあるが、周りにはオタクしかいない。

いや、いる。オタクでない、どちらかと犯罪者のような男が。白い笑い顔の仮面をかぶっている男である。

一人のオタク男子は、その白い仮面の男を見つけると

「ああっ！みんな見ろよ！グロスマンがいるぞ！」

と叫んだ。ざっと辺りが騒ぎだし、駆け寄った。

オタク達は口々に「本当だ！」と言い、手を叩いて喜んだ。

一人のオタクがサッと前に出た。

“前田”という名前の名札をつけている。

「あなたは、ネットで噂になっているグロスマンですよね」

「ああ」

「ここに来るなんて、あなたも『萌え』にはまっていますか？」

グロスマンは、返事をしない。仮面をかぶっているため、表情が全く分らない。

「やっぱりハマっているんじゃないっすか!？」

「お前らと一緒にするなよ」

フツと、グロスマンは吐いた。周りの少年達は呆然とし、メイド少女の手もつい止まった。

「現実と空想の見境がなくなつた貴様らと、いつしよにするな」
「・・・・・・・・」

「フフフフ・・・俺が何故ここに来たか知りたいか？」

グロスマンの言葉に、前田は応答できなかった。

「知りたくないか・・・いいさ・・・どうせお前ら」

グロスマンが、何故か大きく見えた。

「世の中これからオタクが必要だと言われているから、堂々と胸張つてオタクでいるんだろ」

「・・・・・・・・」

どんとグロスマンがテーブルに座り、足を組んだ。

「てめえらみたいなオタクは、これから必要ないんだ。これから必要なのは、プロフェッショナルの力だ。一つのことには専念できる・・・」

「とんつとテーブルから腰を上げた。
「そういう力だ」

グロスマンは外へ出て行ってしまったが、オタク達の沈黙が破られることはなかった。

その時、前田の携帯が唐突に鳴った。

「・・・・・・・・!？」

それには、こう書かれていた。

“オタク 現実ト空想ノ見境ツカヌ
日本ニオケル 諸悪ノ根元 ナリ
”

オタク（後書き）

私はオタクから抜け出せましたが、
オタクのイメージは消えません。

広い世間に出てみて

客観的にオタクをみることができました・・・。

年金と老人（前編）（前書き）

昨日、老人に席を譲りました。

でも僕・・・疲れていたんです。

それでも、席って譲らなきゃいけないんですか？

年金と老人（前編）

平日の電車。

勤勉な学生達と、世の中を支えるサラリーマン達で、あふれて・
いない。

学生よりも、サラリーマンよりも、数が多いのは老人である。
重そうなりユックサックを背負い、ウォーキング用の靴を履いて
いる。

その靴も、ブランド物であり、万札を出さなければ買えないだろ
う。

電車は駅に着こうとしていた。キキキーっとな音を立て、電車は間
もなく停止した。

その途端である。

くわっとなんが押し寄せた。空いている席があると、手当たり次
第に座り、それでも座れない人々で溢れた。

皆、老人であった。

もちろん、電車に乗っているのは老人ばかりではない。なので、
席を譲る若者もいた。

数人だが。

席を譲らない若者もいた。すると、老人達は駆け寄り、

「お兄さんは何処まで行くの？」

と聞き、若者が答えると、

「あーそう！おばさんはもっと遠くまで行かなきゃいけないんだあ。
だから譲ってくれないかなあ……？」

と言っているのである。

若者は、仕方なく譲るのである。

現代、老人は弱者の立場に立たされるとされ、シルバーシー

トまで出来ている。

我々のような若者は、やむを得なくその印象を飲み込むことしかない。

が、そんなモノを信じない奴がいた。

グロスマンである。

一人むんずと席に座り、腕を組んでいる。

そこへ、しめた！という顔をした老人が駆け寄ってきた。

「ねえ……そのお面はどうしたの？」

「……」

「あのね、おばさんはまだ遠くへ行かなきゃいけないんだ。席、譲ってくれんかねえ？」

しばらく、グロスマンは応答せずに黙っていたが、突然口を開いた。

「……あなたのは、国鉄ですか？」

えっ！と老人は声を上げ、しわくしゃの顔をグロスマンに近づけた。

「そうだけど……どうして!？」

「そうだろうと思いましたよ。フッフフ……」

「何がおかしいのよお！」

グロスマンは、バツと立ち上がり、お面に手を掛けた。

クイツと面の傾きを直し、キツと老人を睨んだ。

「知ってますか？貴方の夫の年金は、警察のための年金なんですよ」

「ええええっ!？」

老人は疑った目つきでグロスマンを見た。グロスマンは、目線をそらさない。

「国鉄は、一人で出来る仕事を二人とか三人でやっていた。それに比べて警察はどうだ!？毎日徹夜で働いて、くたくたになって、精神的にも体力的にもぼろぼろだ!だから……」

騒がしい車内が、フツと静かになった。

「警察官が早く死んで、国鉄の奴は長生きした……という
ことだ」

完全に、聴衆はグロスマンに引き込まれていた。彼の感情移入あ
る話し方、それに感化されてしまった人が大勢いた。

しかし、周りにいる年寄りからすれば、決して気分の良いもので
はない。

ついに絶えかねた一人の老婦が口を開いた。

「でもねえ……私たちは戦後の国の復興をしてきたんよお！今の
若い人には分からない、苦労があつたんよお！！！」

分からないこともない……という声が沸々と沸いた。

日本が戦争で負け、その後の復興をしたのは、現在の60代の人
々である。

その苦労は、計り知れないものだっただろう。しかし、グロスマ
ンは

「問題点はそこにある！」

と言った。老婦は、えっ！と声を漏らした。

「確かに戦後復興をしたのは、あんたらだ。だが……問題は、
当時そのような気持ちでいたかどうかだ」

年金と老人（前編）（後書き）

後編に続く・・・。

年金と老人（後編）

車内は騒然とした。

老人多勢と、謎の仮面男との対決は続いていた。

戦後復興の尽力者について説いた老婦は、あきらめの悪い性格らしく、再びグロスマンに抵抗した。

「あつ……あなたねえ、今の若者よりは、私は働いていたわよ！今の人なんて、ずっとパソコンいじっているだけじゃない！」

グロスマンはニヤリと微笑し、うつと腰を上げた。

「じゃあ、やってみるがいいさ。IT企業に勤めてみれば。ソフトバンクも、ライブドアも、社員の仕事量は並大抵のものないですよ。たぶんあれを一生続けたら……」

「なつ……なによお」

「廃人になるでしょう」

もう、反論するものは誰もいなかった。

が、話はここで終わらない。

席を立ち、下車したグロスマンは、そのまま川沿いを歩き出した。眩しい夕日が、川に映り込んでいた。

ゆらゆらと揺れる柳の葉は、風に乗ってリズムを刻んでいた。

グロスマンは、歩いていた。が、突然立ち止まった。

ゆっくりと、沈みかけた夕日の方を向いた。仮面がいつそう笑って見える。

「フフフフ……事故っぽくしといてやるよ……」

後日、老人15人の溺死体が、山奥の川で発見された。

よく見ると、グロスマンと話していた人たちだったという。

警察はこの15人全員を、自殺と判断した。
この結果が真実か否かは分からないが、一つだけ言えることがある。

自殺ではない。殺人である。

犯人は、貴公の判断にお任せする。

では、なぜ自殺に見せかけたか。

決して逮捕されるのが恐いわけではない。

自殺になると、警察の仕事が殺人より楽になるからだ。

だが、そんなことを知っていたのだろうか……。

年金と老人（後編）（後書き）

高齢化が進んでいることは事実。

この事実を黙殺するより

なんとしてでも受け止めなければ
いけないんですよねえ・・・。

二一ト

働かない青年。
二一トという。

「翔ちゃん！ねえ、翔ちゃん！」

今日も母親の叫ぶ声が、家中に響いた。

「ねえ翔ちゃん！」

「うるさいなあ……」

寝ぼけ顔で部屋から出てきたのは、20歳くらいの青年だった。
母親は、丁寧な言葉で

「今日は久しぶりに外出してみない？」

と言った。しかし青年は

「いいよ、別に……」

と言うだけであった。無愛想である。

そして再び、部屋の中へ戻っていった。

青年は、ゴミで散らかった部屋の一角にある机に座った。
机の上には、パソコンが一台ある。

スイッチをつけ、インターネットにつないだ。

「新しい書き込みが……あるかな……」

暗く呟いた。引きこもりのようにも見える。

青年の開いたサイトは、白く、笑い顔の仮面がマークのサイトだった。
つた。

その名も「ザ・グロスマン」

そこには、ブログというものがある。

いわば日記である。

「ウフフフ・・・今日の書き込みはなにかなあ？」
青年は怪しく呟き、ブログを開いた。

11月3日 文化の日 12時23分

このサイトを、ニートが見ている。
ニートなど・・・。

「・・・!？」

なんだっ!と青年はうなった。
まぎれもなく、青年はニートだった。

「なっ……なんだあ……!？」

青年はすぐに掲示板に苦情を書き込んだ。

：僕はニートです。あなたはニートを敵にしましたよ。

返事がきた。

Re：ニートみたいに日本の海底で生きる奴を敵にまわしても、
怖くない。

青年は、つかつかと来てしまった。

Re：ニートもニートなりに一生懸命生きています。

Re：ニートは、年金で暮らす、人間のガン細胞だ。人間は、何故働くか知ってるか？決して金の為じゃない。家族のためでもない。何故が分かるか？

Re：分からない。

Re：人間は、働かされるものじゃない。働こうとするものだ。普通の人間は、働くことに意義を持っている。それを絶つたものは……生きる資格は……。

「んっ？なんだあ？」

ない

クリアを実行しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2603a/>

グロスマン

2010年10月8日15時33分発行